

(日本語原文)

私の感想

南京大学日本語学部 准教授 趙仲明



2012年初春、「笹川杯全国大学日本知識大会」優勝者訪問団が日本科学協会の招待により、日本研修旅行を行いました。私は引率として訪問団に加わり、学生と一緒に東京・沖縄・京都・大阪にまわり、日本民俗の体験、学生や市民との交流、古都の歴史散策など、充実した8日間の旅で楽しい思い出をいっぱいつくってきました。豊富な内容の盛り込んだプログラムを組んでくださった日本科学協会をはじめ、手厚くもてなして下さった日本の関係者の方々に心より感謝を申し上げます。中国の大学生達にとって今回の貴重な体験を通じて、日本という国の本当の姿を身近に見ることができて、日本に対する理解も深められたと思います。そしてそのことはきっと将来の若い世代間の中日友好事業につながり、今日蒔かれた種はいつか大きく実ってくるでしょう。

中国語にも日本語にも「百聞は一見にしかず」という言葉があります。自分の目で見、心で感じ、自分の知らないことよさを発見することから異文化を理解するための踏み出す第一歩でしょう。人間は先入観を持って人を見る傾向は常にあります。集団利益によって行われる教育やマスメディアの宣伝に左右されて、誤った情報を得たりして、それに基づき、自分と異なった価値観や生活習慣を持った人々の生き方を否定してしまうことは日常茶飯事なのです。それは実は相手の人の本当の姿がわからないことから招いたことです。私はこの十数年日本語教育の現場で教鞭を取りながら中日文化交流の仕事に携わっている中、このようなことをたくさん経験しました。しかし、知らないから仕方がないといったら知らないことから生じた誤解はいつまでも解くことができません。したがって、積極的に他者と接し、他者を理解しようとする努力が大事なのです。その意味から、中国の学生は今回の日本訪問で異文化体験の大切さを実感できたことは何よりの収穫だと言えます。

8日間の旅はあっという間に終わってしまいましたが、東京の近代的な町だとか、沖縄の綺麗な海だとか、京都の素晴らしいお寺だとか、印象に残るものはたくさんあります。しかし、何よりもめぐり合った人々の素敵な笑顔が一番忘れがたい。心が通じたからこそ、笑顔になり、すべてが美しくなるに違いありません。美しく感じたことを如何にして人に伝えるかは私たちに負かされた仕事でしょう。

(中国語原文)

南京大学日文化研究センター日本図書担当 王静



このたびは日本訪問の機会をありがとうございました。日本に対する印象はぼんやりしたものであったが、わずか八日間ながら、直感的な感覚も得ることができたと思います。

清新な空気、清潔な大通り、沖縄の美しい砂浜はどれも深く印象に残っています。もちろん、一番の思い出は、各地で私達を出迎えてくれた学校や交流してくれた学生の皆さんです。皆さんのご親切で、抱えていた心配が吹き飛んで、とても感動しました。特に、沖縄と豊見城市で市民の方と一緒に黒糖製造を体験したこと。沖縄の人の勤勉さと善良さがとても深く感じられたのです。

南京大学の日本語図書館は本学の先生方や学生の皆さんが主な利用者ですが、他学からの読者も訪れます。当館の図書は大部分が日本科学協会からの寄贈図書です。寄贈図書は当館の蔵書を豊かにしてくれるだけでなく、青年学生と我らが隣国—日本という国、民族とを結び、より深く理解するための橋を架けてくれました。私も今まで通り担当業務をしっかりと行うだけでなく、私達両国の、特に若者のコミュニケーションや交流、友情の増進に微力を尽くそうと思います。

最後になりますが、改めて顧文君先生と浅山さんに感謝を申し上げます。お二人が労苦を厭わず細かな気配りをしてくださったことも、すばらしく心温まる記憶となりました。

(日本語原文)

日本の旅についての随想

蘇州大学日本語学部 3年 翟鵬志



光陰は矢の如し、今度の日本への訪問は既に終わった。たとえ少しでも振りかえて、見た日本の光景、また考えたことがたくさんある。

実際に、私にとって、今回は初めて日本の土を踏んだが、東京に着いた時、目の前に全てはきわめて面白いと感じていた。中国のより、やはり日本の空気はもっと爽やかに新鮮であるかもしれない。また、日本のことはとても綺麗だと思われるが、道には汚いものはあまり見えないし、町には花も木も一杯ある。とりわけ、私の心は東京タワーとスカイツリーなどのように立派な現代建築に深く感動された。その他に、最も印象があるのは沖縄の諸島であるが、あそこの天気とか、風俗とか、それに白い海浜はまるで天国のようであると心より思った。

それ以外、私は日本人のことをすごく感心した。なぜかという、それは日本人の礼儀が正しいからだ。交通信号を正しく守ったり、挨拶を正しく交わしたり、ゴミの正しく分別されたりするのは日本人にとって、もはや何よりも普通のことになっている。

しかしながら、ただ七日間では日本の全部の姿を見ることは全くできないが、将来、もしチャンスがあれば、きっと日本に何回も行くことにしている。

最後に、日本科学協会に、または日本財団に心より誠に感謝している。今度の招待に恵まれて、私の人生にとって、忘れないものが一杯になっている。旅も楽しく、料理も美味しく、本当にありがとうございました。

(日本語原文)

日本についての新しい印象

蘇州大学日本語学部 4年 左瑤瑤



日本財団、日本科学協会のおかげで、訪日したチャンスをいただきまして、まことに感謝しております。これを通じて、新しい日本を発見しました。報道されたものと同じところもあれば、違うところもあります。

日本人は集団意識が強いし、思いやりがあると本に書いてあるのですが、自分自身で体験するならば、本当に感動させます。ホテルに泊まったとき、エレベーターの中で整備士と出会いました。その整備士は「いらっしゃいませ」と言い、後は「失礼いたします」と言いました。私たちはびっくりし、感動を覚えました。また、どんなサービスを受けても、「ありがとうございます」という言葉がよく聞こえます。日本語の「ありがとうございます」は中国語の「謝謝」よりちょっと長いと思われれます。「ありがとうございます」という言葉を続けたら、疲れませんか?そういう疑問を持って、家へ帰るような親切と楽しさをくれた店員さんに感謝すべきと考えられます。

日本に滞在中、一番印象深いのは日本人の環境保護意識が強いことです。どこへ行っても、「環境にやさしい」という言葉がよく見えます。お台場へ行ったとき北極熊の彫像は私たちの心を打たれました。北極熊の顔には涙が落ちそうです。彫像の下にも「一年間、地球中損害された森の面積はどれくらいですか?」という質問があります。さすが日本人ですね。自然と共に共存しています。中国人のみならず、世界中の人にとって、いい勉強になると思われれます。

それだけでなく、日本人は他人に迷惑をかけないように一所懸命頑張ります。例えば、レストランで食事した後、ある学生は飲み物のピンをそのままにテーブルにおいて、出かけましたが、「これはよくない」と言われて、再びレストランにピンを取りに行きました。中国の人にとって、それは多分初めてでしょう。中国でピンなどのゴミを片付けるのは普通店員のことです。

それに、電車に乗った場合、留学したことがある友達に「日本では年寄りに席を譲ると言う現象がありますか?」と聞いてみましたが。この結果は中国をぜんぜん違います。中国では「尊老愛幼」が美德なので、普通年寄りに席を譲りべきです。日本ではもし席を譲ると、相手は怒るかもしれません。これは日本人の心の中で他人に迷惑をかけないような意識を持っているからです。

この間、新しい角度から日本と日本人を理解しました。中日両国は友好と誤解が共存しているかもしれませんが、大島美恵子会長のおしゃった通り、この活動の初志は日本を了解し、両国の誤解を解く知日家を育成するのです。中日未来の友好といえ、若者にとどまらず、社会の各方面はそのままに両国の状況と発展を報道すべきです。双方人民がいつまでもよく理解し、友好交流するのは心から祈っております。

最後は、日本側の丁寧なおもてなしをいただき、新しい日本を見せてまことに感謝の意を表しております。ありがとうございます。

(日本語原文)

愛を感じる旅

蘇州大学日本語学部 3年 肖雅



今度、日本へ行って八日間の訪問をした。このわずかの八日間で、日本の伝統文化や現代のファッションなどをいろいろ体験した。それに、先生たちからいろいろお世話になりありがとうございます。また、日本人の友たちの熱意を感じた。彼らは試験中なのに付き合ってくれて本当にすごく感動した。今回、こういうチャンスがあって、日本に来て、たくさんの日本人の友たちができて、人生の中での最高の思い出になると思います。

今回はわたしは始めて日本にきた。着きしだいに、涼しくてきれいな空気を感じた。空も水色で、とてもきれいだとおもいます。こんな風景を見て、空気を吸って、私は旅の疲れがさっと消えていった。ずっと前から日本の空気がきれいということが知っただけでも、実感したときはとても感動した。

今度、私たち一行は東京、沖縄、大阪、京都四つの都市へ見学しにいった。この四つの都市はどちらもとてもきれいで美しいと思う。現代化の大都市もいるし、伝統的な都市もいる。いろいろな風景が見られる。とてもうれしいとおもう。

今回、一番印象に残っているのは日本人が動物に対しての愛をどこへいっても感じられているということである。最初にかんじたときは早稲田大学の学生さんたちが案内して上野公園へ行って見学する時だった。そのとき、いろいろな看板が見られた。近寄ってみると、その上に動物の遺棄、虐待は犯罪ですという一言を書いてあった。また、鳩の飼い主にもいろいろな要求をちゃんと規定しているといったような看板も見られた。これらを見て、わたしはびっくりして、また、すごく感動した。中国には、このような看板まだすくない。わたしは動物好きで、みんな動物をかわいがるといこうを望んでいる。その後、浅草寺へ行ったときもこんな事があった。日本人の友たちといっしょに歩いているうちに、ある鳩がこっちに向かって歩いてきた。わたしは近寄ると彼がきっと飛んでいこうと思いつつ、わざと彼に近寄っていた。しかし、かれはただ早く前へ歩いていった。ぜんぜん人間に怖がっていなかった。これを見て、私がびっくりした。中国では、公園で鳩に近寄ると、きっとぱっと逃げると思う。でも、日本でぜんぜん違う。たぶん、人間はかれらにしたいからこそ、人間に怖がらないと思う。また、ほかの都市にも、主人が動物を赤ちゃんのように抱いて散歩する姿がよく見られる。いつか中国でもみんな動物をかわいがって、家族の一員として一緒に送られるだろうか。この日が早く来るのを心から祈っている。

今回の見学する旅で、いろいろ勉強になった。そして、たくさんの人と出会えるのは縁だと思う。約束のように、六十年のあと、みんなとまた一緒に楽しんで交流できるならいいと思う。

(日本語原文)

四川外国語学院日本語学部 4 年 李玄



いつも考えているが、京都って一体どんな町なのか。

平安京から千年にわたって、数え切れない人々に語られてきた。

淡々と哀れの帯びた『源氏物語』を王朝の夢幻とすれば、をかしき『枕草子』はその実相といえよう。平安時代の王朝物語から、近代のノーベル賞受賞作「古都」にかけて、違う目に受け止められ、違う言葉遣いとして洗練されたにもかかわらず、その実体は疑いなく京都である。

しかし、京都を訪れたことのないから、都に吹く風はどんな風か、私には分からない。

幸い、その機会がきた。

ハードなスケジュールに、最後の日の下、ちゃんと京都が書いてある。

興奮と緊張が混じって待ち望んでいる経験は誰しもあるが、これはこの上もなくつらいことであろうか。まるで恋人とデートするまで、待たざるを得ない時間のようなものである。

しかし、実際にその時間になると、なんとなく落ち着いてきた。

たぶん急いでいるせい、なにもかもゆっくりと見入る時間がなかなかない。以前暗誦したことのある京都の小道の名、一々と対応するのは言うまでもなく、ちらりと見ることもできない。

現に清水寺から京都全体を見下ろしているが、京都ってどんな町なのか言わせて見れば、やはり何の言葉も出てこない。

興奮でも何でもない、まるで旧友再会のように、激しい嬉しさの後には、ただ落ち着いている馴染みが空気に漂っている。

そう、京都は旧友といえよう、ただ会うのは初めてであるが。

京都その名を知ってから以来、今年でちょうど10年目。今この目に映っている京都と、10年前の乃至千年前のと、移り変わりはきっとあったに違いないが、残り続け、変わったことのないところもあろう。あな、ひょっとしたら私はなんと王朝の人と同じ風景を見ているかもしれない、同じ道を行っているかもしれない。

遠方に夕暮れで山吹色に染められた山の端、それを見て、思わず『枕草子』の中の「秋は夕暮れ」の段が思い浮かんできた。

物語は続いている、しかし、一日の京都ツアーはこれで

京都、短い間であるが、夢のような思い出をくれて、ありがとう。

また再会を楽しみに

(日本語原文)

訪日感想文

四川外国語学院日本語科 1年 王海倫



まず、今回の訪問機会を与えてくださった日本科学協会の皆様に深く感謝の意を表する次第であります。お蔭様で、豊富豊かな一週間を過ごすことができました。一週間だけの訪問は短いのですが、私はきちんと心で日本という国を観察し、理解しようと思いました。そして、この一週間で得た感想をまとめて、これからの努力方向についても目処がつくようになったのです。

今回の訪問印象というと、ひとつのキーワードがあります。それは「絆」であります。現在の中日両国はまさに経済、文化、政治、科学、いろいろな分野におきまして深い絆を結んだのであるということが今回の訪問によって深く感じられました。皇居や温泉など景勝地に行っても、そして秋葉原や銀座のような繁華街に行っても、中国の観光客が大勢いますし、中国語のガイドワードもところどころ見えます。日本の観光産業を支えるには、中国観光客の力が無視できないという印象を与えてくれました。また、日本の大学生との交流の中に、現在の就職活動に中国語の勉強は不可欠であるという声も次々と出てきました。これから、中国へ行き、仕事をしたいという学生もあります。日本の若者世代に中国の発展に関心を持っていることに心から喜びました。

これから、中日関係がますます繁栄していく、その友好の絆がますます深くなることを心から信じております。

しかしながら、われわれ中国はGDPとして日本国を越えたにもかかわらず、日本から勉強すべきことがまだまだあると思います。一番印象深いのはやはりエスカレーターに乗る時のことです。日本へ行く前にもう本で読んだことがあります。日本人がエスカレーターに乗る時は必ず右側を急用通路として残すということです。そして、東京へ行ったら、本当だ。みんなルールを守っているのだ、と深く感じました。そして、地下鉄に乗るときも、必ず降りる人のために、ドアの前の道路を残して横側から乗車するのです。社会の文明進歩はこのような小さなことにあると考えています。

実は重慶の地下鉄もモノレールも日本の技術を学んで建設されたのです。地下鉄の設備とか、車内の配置も日本のとほぼ同じです。重慶から来た私日本のモノレールを見たら、親切感を持っていました。しかし、人々のエスカレーターの乗り方とか地下鉄の乗車とか、日本人の順序規律と比べたら、重慶の風景はまったく話にならないのです。ラジオ放送が毎日流されても、まったく役に立たないのです。お恥ずかしいことですが、人々に反省させるべきことです。もし、これからの中国は経済だけを発展させて、文化や国民素質をおろそかにしたら、いつかまた日本に追い抜かれるに違いないと思っています。そればかりでなく、世界の中にも長く繁栄していけないと思っています。これからの中国は、長期の発展を遂げるために、隣国である日本から勉強すべきことがまだまだあると思います。

以上述べるように、これは私の目にある中日関係です。いろんな分野でお互いに支え合い、勉強し合い、追いかけ合いという深い絆によって結ばれています。

そして、その絆にある私たち若者世代がこれからはきちんと自分の使命を理解しつつ、その絆が末永く存在していくには、自分なりの力を捧げる覚悟であります。

(日本語原文)

美しい日本

四川外語学院日本語学部 4年 周俚伶



2月1日から2月8日まで、日本科学協会のお招きに応じ、日本へ見学に参った。大学ですつと日本語を勉強してきたが、日本のことについて、ほとんど本で読んだので、今回、日本はどんな国か、ぜひ自分の目で確かめようと思っていた。

8日で東京、沖縄、大阪、京都を回って、まるで走馬灯のごとく、しかし、日本はとても素晴らしい国だという感じをした。街中はきれいで、ごみはちっともない。人々は自動的に秩序を守っている。交通は発達していて、どこまでも行けるし、コンビニが多くあるので、生活は便利だし、特に、買い物をするとき、店員はいつも微笑みをして、優しい声で話して、それに、こまかいところまでお客様のために、考えてくれる。自分の国と比べて、中国は日本から学べるところがたくさんあると思込む。

一番印象に残ったのは、沖縄のあの美しい海だった。底まで見えるほど清いし、光が射すと、水面がきらきらするし、雲南省出身だから、生まれてから、海を見たことが一度もなかったのも、そんなに美しい海を見たら、感動せずにはいられなかった。

最後、主催者の方々、訪日団の皆様、日本の学生たちと出会って、一緒に一生忘れがたい思い出を作った、本当に嬉しかった。また、チャンスがあったら、いつか日本へ二度と行きたい。

(日本語原文)

南京大学大学院 日本語科 1年 杜威凡



南京大学の杜威凡です。まずは日本科学協会の皆様に厚くお礼を申し上げます。日本に行くのが初めてですから、肌で日本を感じるこの機会がありがたいと思います。立派なビルが林立する東京、広くてきれいな海がある沖縄、うまいものいっぱいのお阪、そして、日本伝統的な雰囲気にもまれる京都。それはみんな忘れがたい記憶になります。日本では、人生は短い、芸術は長いということばがあります。今度の旅をきっかけ、これからはこの短い人生でできるだけ長い歴史を持つ日本の芸術などのことを楽しみます。2011年を表す漢字は絆ですが、この絆は日本国民の絆だけではなく、日中両国の国民の絆ではないかなと思われます。最後ですが、日本側の方々に改めて感謝の意を表します。ありがとうございました。

(日本語原文)

八日間日本で感じたこと

南京大学日本語学部 4年 王格蕾



あっという間に八日間が経ち、中国に戻り、大学での最後の一学期が始まる。時々朝起きた時に、まだ東急インに泊まっている錯覚で、今日の日程はなんだろうと思ってしまう。そして、東京、沖縄と京都で出会った友達とメールのやり取りをしているうちに、みんなはすぐ近くにいるというような感じがわいてきた。

東京の寿司屋に行き、注文しているときに、日本人の学生二人とすしネタの好みが似ているので、自分でもびっくりした。そして、京都の大学生と実家に近い大学に行くのがいかどうかということと話していたら、みんなが挙げた理由は中国の学生が考えていることとほぼ一緒で、例えばいつでも実家に帰られるとか、食べ物の味に慣れているからとか。そういったことから、なんとなく親しみを持ち、日本人の学生と楽しい会話ができる。

そして、今回の旅で日本のあることに気付いた。それはどんな事件であれ、どのメディアであれ、日本ではめったに露骨な写真が載せられたり、映られたりするのである。死体などと言うまでもなく、少し血痕の付いた現場の写真でも使いにくいようである。そのとき、子供の殺害事件があったようだが、テレビではまったく生々しい映像はなかった。その背景には二つの理由が考えられるのではないかと思う。一つ目は視聴者もしくは購読者の立場から、生々しい表現より、事件や事故などの経緯とその影響を報道陣が一生懸命深く掘り出すことこそ求めているからである。二つ目は当事者またはその人の家族や友人から見れば、写真が再び衝撃を与えることになる恐れがあるからである。私も報道に使われる写真と画像を慎重に選ぶべきだと思っている。ただ衝撃を与えたいというだけで、ニュースをやっていると、時には非人道的な行為になりかねない。中国ではここ数年この点ですいぶんよくなったけれども、時々“見た目の怖い”ニュースもでてきてしまうから、日本のマスコミのようにもっと気を遣ってほしいのである。

以上のように、すべては小さなことかもしれないが、これから大学院で日本について勉強するつもりなので、この八日間は励みになると感じている。

(日本語原文)

訪日の感想

南京大学日本語学部 4年 陶梦娜



待望していた八日間の旅だった。「笹川杯全国日本知識大会」に参加するタスクを引き受けてから、奨を獲得できるようにがんばってきた。こんな期待のせい、試合に出たときの緊張さ、奨をもらったときの感動、出発するときの興奮、旅の楽しさは格別なものだった。それに、日本科学協会と日本各地でいろいろな活動を設けてくださった方々に感謝の気持ちをずっと持っていた。

東京に着いたときにすぐタクシーの後ろに貼ってあるレベルに気づいた。「日本 がんばれ」という字が目に入って、何となく悲しくなってきた。なぜかという、私は2010年から日本で一年間留学していた。2011年の二月末に中国に帰ってからすぐ東日本大震災が起こった。他人から見ると運がよかったと思うかもしれないが、私は日本が恐怖に陥ったときに、日本と一緒に戦えなくて申し訳ない気持ちにもなった。日本の皆さんが一丸になって、災後の復興に頑張っている姿に感心している。「和」の文化があってからこそ、回復がこんなに早くできるだろう。

上野公園、アメヤ横丁、神保町、浅草寺はどちらでも東京のシンボルで、早稲田大学からのボランティア達は詳しく説明してくれながら一緒に散策していた。モダンな東京都の真ん中に一片の緑があって、それは皇居だ。現代化が進んでいても、伝統をなるべく守る日本の特色だと思っている。沖縄の天気は意外とよかった。晴れ渡っている空、澄んでいる海とちょっと黒糖は沖縄が私にくれたプレゼントだ。大阪の賑やかな商店街、京都の古い町、清水寺と金閣寺も印象深かった。天下の台所として有名な大阪が情熱な歓迎を私達にくれた。京都の美しさから、日本人が伝統を守り、細かいところまで力を注いでいることがわかってきた。

この旅は単純な旅行ではなく、交流である。日本をこの目で見ないと、真の日本が分からない。日本の若者と直接に接触しないで、話を交わさないと、異文化から生じた壁が消えない。若者は国の将来とよく言われるから、両国の若者達の交流が重視されているのではないかと私は考えている。私たち一人一人の力はたいしたものではないが、時間の経つにつれて積もっていくと、いつかたいしたものになるだろう。この一週間で出会った日本の皆さんとこれから絶えず連絡をとって、微力でありながら、両国の交流に少しでも役に立とうと思っている。これは私の小さな願いでもある。

(日本語原文)

山東大学大学院 日本語科 1年 張笑笑



旅行をするとき、私はいつもそう思います：目の前の風景をできるだけカメラで記録し、写真というかたちで保存したいのです。なぜならば、写真は記憶の証拠です。一枚一枚の写真を通じて、一つ一つの思い出を胸に刻み、いくら時間が経っても、忘れたくないからです。今回の旅にも、たくさんの写真をとりました。今、これらの写真を見て、八日間の旅を思い出しました。

最初に訪れたのは東京です。東京といえば、おしゃれやモダンな近代都市のイメージがあるだろう。たしかに、東京都都庁の展望台に立って、目の前に広がるのは高層ビルや金属感のある建物ばかりです。しかし、実際に町を歩いていると、東京の隅々まで歴史があります。伝統的な要素と現代的な要素がうまく融合しました。ホテルの隣に愛宕神社があります。周りはコンクリートで作ったビルに囲まれています。境内に入ると、不思議に落ち着いた気持ちになりました。そして、二月三日に節分の豆まきを初めて体験しました。

日本人は穏やかや遠慮がちであるという印象は世界中で知られていますが、豆撒きの時の日本人はその性格のもう一つの側面を見せました。豆撒きが始まったら、人々が一生懸命に跳ねて、豆を掴もうとしています。老若男女をとわず、みんな真剣勝負をしています。日本人がこんなに激しくものを争っている場面を初めて見ました。みんなの幸せになりたい気持ちが強く伝わってきた。そして、争っても規則があります。だからこそ、安心して小さい子どもを連れて行った母親もありました。

三日間の東京見学のあと、沖縄に行きました。東京と違って、南国風情をたっぷり感じました。青い空、白い砂、七色の海、どんな言葉を使ってもその美を完全に描くことが出来ません。ここで暮らしたいと思うほど好きです。そして、もう一つ深く印象に残ったのはある女の子の笑顔です。店でご飯をするときに、沖縄の伝統的な琉球舞踊を鑑賞しました。見ているうちに、踊っている女の子に惹かれた。彼女の美しく踊っている姿に目が離せません。琉球舞踊について、私はド素人ですが、彼女のパフォーマンスをみると、心から美を感じました。特に、彼女はいつも微笑んでました。その笑顔に癒されました。

沖縄の次は大阪でした。大阪城公園にはたくさんの猫がいました。のんびりして寝たり、優雅に散歩したり、人と一緒に平和に暮らしています。そして、心齋橋は大阪のもうひとつの顔を見せました。にぎやかで活気で溢れています。こういう雰囲気になると、なぜか一種の安心感がします。

今回の旅の最後の目的地は古都一京都です。バスからみた京都の町並みは大阪と全然違いました。鮮やかな看板とか高層ビルとか、一切見えませんでした。地味というほど素朴でした。町並みが素朴だからこそ、古都の雰囲気が現代文明から守られました。午後、金閣寺と清水寺の見学によってもう一度日本の伝統的な美をしみじみと感じました。初めての見学ではないですが、思わず初めて見学したように感動しました。

東京、沖縄、大阪と京都、わずか一週間のなかで、私たちは日本の異なる側面を体験しました。四つの都市にはそれぞれな特色があって、伝統と現代、西洋と東方の矛盾と調和を満喫しました。

前にも言ったように、今回の旅でたくさんの写真を撮りました。それと同時に、写真によって記録できない思い出もたくさん作りました。たとえば、日本の学生たちとの交流でした。東京で一日中、日本の学生たちが案内してくださって、いろんなところを回りました。沖縄でも当地の学生たちと一緒に黒糖を作ったり、海辺ではしゃいだりなどをしました。京都で同志社大学を見学し、食堂で学食を食べました。好きなアニメから勉強の悩みまで、みんな楽しく話し合いました。こうしているうちに、共通するところも全く異なるところもたくさん発見し、お互いのことをよりよく理解するようになりました。

日本の学生との交流は日本を理解するひとつの窓口であると思います。この窓口を通じてみた日本は元気で親切です。これからも、ひとりひとりとの出会いを大切にしながら、交流を続けようと思います。

実は、日本財団と日本科学協会のご招待より、日本を訪問したのは今回で二回目です。前回の訪問を通じて、色々と収穫しました。帰った後、ずっと、またこんなチャンスがあったらいいなあと思いました。運が良くて再び優勝したことは夢みただった。ずるいですが、やはり日本に行きたいと思って、また来ました。今、来てよかったと思いました。ここで、日本財団と日本科学協会に心から感謝の意を申し上げます。誠にありがとうございました。

(日本語原文)

今回の交流の感想

上海海事大学日本語学部 4年 蘇穎爽



私は日本語の勉強を始めてから、普段よく日本についての本を探しては読んでいたが、読むほどかえって関心をもっと強くなる。この八日間に、自分の目で見たり、自分の耳で聞いたり、心で感じたり、頭で考えたりしながら、よく「そうなんだ」と感心していた。このような機会をいただいて、本当にうれしかった。

まずは、東京、沖縄、大阪と京都、この四つのところの街を歩いてみると、やはり雰囲気が違うような気がしていた。忙しそうなお客の多い人たちは歩くのがはやい、沖縄の人たちは親切な客好き、大阪の人たちは賑やかで冗談好きで、京都の人たちは柔らかく優しい感じがした。

また日本の店に入ると、その店員の笑顔が印象的だった。店によって同じ品物でも値段が違うということが日本には少ないと、前から教えてくれた人がいる。その時はただそれを聞き流しただけで、何も考えなかった。今度日本で買い物などをしながら、日本の店のサービス質に感心した。そのようなサービスは中国にはないともいえないが、やはり一般的にはサービスの質が日本に劣ると思う。

自分でよく考えてみると、ちょっとしたことが分かってきた。中国では競合店と少しでも差別化を図れるように、まずは価格競争を選ぶだろう。値段が安いから買いに来る客も多くなると思うからだ。また安い店では安いサービス、高い店では高いサービスを受けることも珍しくないといえる。

日本はどうだろう。競合店の間に値段の差があまりないし、安売り競争をしてもやはり価格はだいたい同じだ。それで、安くても質のいいサービスを目指す店が多く出てくるだろう。結果として全体のサービスレベルが上がると思う。

日本の大学生や留学生たちとの交流も楽しかった。日本の大学生の中で専門が中国語ではなくても、中国語を習っている人が少なくない。言葉の発音や中国のことについて聞かれたこともある。特に中国に旅行したい人に「お勧めはどこですか」と聞かれたときは一番恥ずかしかった。自分が中国人であるのに、中国のことがよく知っているとは言えない。急に聞かれるとどこを勧めればいいのか分からなくなった。これからは外国へ行く時にまず自分の国のことがよく分からないといけないと感心する。

留学生の中に中国人が一番多かった。私も日本に留学したいので、彼たちに色々尋ねたが、日本の生活は大変だけど面白かったと答えた人が多かった。今度の機会を通して、日本留学を体験したい気持ちをもっと強くなった。もうすぐ卒業するから、今のうちに私も頑張らなければいけないと思う。

日本科学協会にこのような素晴らしいチャンスをいただいて、本当に感謝の言葉もない。2012年2月8日は今回の文化交流の終わりの日ではあるが、交流はまだ終わっていないとも言えるだろう。私は今回の見学をきっかけとして、勉強になったことがたくさんある。これからの中日の友好関係を願っている。

(日本語原文)

訪日所感

黒龍江大学大学院 日本語科 2年 蔣青青



今度の訪日は私にとってはじめてだから、楽しみと同時にちょっと緊張していた。別に知らない人と会うからといって緊張しているのではなく、今まで中国で教えられてきた日本と日本人についてのすべてのことは、これからこの身で感じられ、この目で見られることにとっても落ち着かないのである。

東京人の忙しさ、沖縄人の素朴な笑顔、大阪人のユーモア、京都人の奥ゆかしさ、皆同じ日本国の人でありながらも、それぞれ各地地方ならではの個性を持っている。私はその個性を味わいながら、彼らと楽しく会話のやり取りをした。特に大阪城で記念物を買うときに面白い話があった。さまざまなキーホルダーに目がくらんでいる私は、どちらのにするのに迷っていた。同行の王さんは「先輩、早く決めなさい。時間切れですよ。もうすぐ集合ですよ」って、私を催促した。私はとりあえず一つを決めてからすぐ店員に渡して、ほかのキーホルダーを探しまくって、そして次々と店員に渡している。気の早い王さんは「还有（また）、还有（また）」って中国語で店員に向かって話した。たぶん彼女はそのときまだ意識していないだろう。中国語を知らない三人の店員はその状況を見て、王さんに倣って、「还有（また）、还有（また）」って一斉に私に向かって話し出している。私はその三人の熱心さとユーモアに思わず大笑いをした。大阪の人は本当に面白いですね。

また、クイズ大会に参加したせいか、何かを見るたび、いつもその関連知識がすぐ頭の中で浮かんでくる。たとえば、観光バスで富士山を見たときにふと「富士山が最後噴火するときはいつですか」という問題を思い出した。その後、慶応大学の学生に話したら、「えい？そういう質問あるの。面白いね」って、彼女は不思議そうに言った。皇居を見学するときも同じである。「なぜ、皇居の地面と地下はみんな砂利と小石ばかり敷いて置くんですか」。スカイツリー、首里城、大阪城、金閣寺、清水寺、これらのところへ行ったときでもそうである。最初、自分がおかしくなったのではないかと思った。でも、今は違うと思う。クイズ大会のおかげで、今まで知ってきた日本をもっと知らせ、そして、本当に目にするときにそのイメージをもっと具体的にさせたのである。目の前の日本と私の頭の中で想像した日本をいちいちチェックしているからである。実は目の前の風景や単なる関連知識だけでなく、日本という国の風貌や、大和民族という人類の習慣や行動についても、私は確認している。もちろん合致しているところもあれば、そうではないところもある。私はあっていない部分をまた頭の中で調整して、できるだけ全体的な日本のイメージを構造する。それは、ほかでもない私の中の日本だから、そしてそのイメージをもっと周りの中国人に知らせておき、もっと日中両国の親密関係を深めたいと考えている。

さらに、今度いろんな大学の学生と交流することができて、本当にうれしかった。私はすでに院生二年生なので、最初名簿を見るときに年齢上では今度来る日本の学生より2歳から5歳まで年上だから、ちょっと不安である。でも実際に会話をしている間に、お互いに気持ちが溶け合っていた。中国の学生であっても、日本の学生であっても、それに年齢の差があっても、皆大体同じ悩みを抱えている。就職の戸惑い、恋の悩み、また、留学するかどうか、院に行くかどうか、皆は皆なりに迷っている姿を見せあっている。でも迷っていても、その一面に彼らが自分の将来のために頑張っている姿を見られる。それを見ているうちに、私は過去の自分をもう一度見られ、彼らの成長と成功を祈りつつ、同時に、私は自分の将来をもっと明確にさせていた。やはり、彼らと比較して、私は生活にも学習にも勉強不足で、これから勉強すべきところは、学ぶところは山ほどある。そんな自分に今まで失った時をもう一度つかめたいのである。

最後に、私は今度たくさんの人とめぐり合えて、本当に感動していて、それに心から感謝しておる。こういう素敵な出会いこそ、私のこれからの人生の道で引き続き進ませる原動力になった。今、心の中

で再び日本をもう一度訪れ、親切にいただいた人々と再会する日を心から祈っておる。

(日本語原文)

調和の国—日本

揚州大学日本語学部 3年 王玉玲



先日、日中の使者として、日本に訪問しました。その中に、もっとも印象が私に与えるのは、日本と言う国の調和の精神です。

まず、東京を例にします。東京は都市の中に、最も発達するのではないかと思います、スカイツリーであれ、東京タワーであれ、東京で立てられました。いろいろの専門店もここに数え切れない。ファッションといえばもちろんファッションです。しかし、古典的の文化とか、建築とか、日常生活の慣わしとか、時代の流れにつれて、捨てられるわけではない、現在の生活とともに共存します。そして、日枝神社での豆まき儀式に参加したたくさんの日本人を見て、心から感心します。

それ以外に、目まぐるしい高層ビルをまがると、古典的な神社とか、ある名人の記念堂とかも見えるかもしれない。それは、現在と過去の調和です。あとは沖縄。

沖縄に来て初めて、ふつうの田舎ではないかと感じました。でも、ガイドさんの話によると、建設はできないわけではない、歴史をそのままに保持していきたいと市民たちがそう考えるのです。それで、沖縄の自然環境がとってもきれいです。工業を発展しないため、現地の人々は自然資源を利用して、環境に汚染なしに生きています。そう、農業です。私たちが見学した“空の駅”の先生たちがサトウキビを利用して、黒糖を生産します。それは、人と自然の調和です。

最後は大阪。大阪の人々の熱心が有名ですよね。私も体験しました。

あるお土産やの中にぐずぐずして買い物をしている先輩を見て、もう集合の時間だと思いながら、大声で先輩に叫びました“快点，还有，还有，还有...”中国語の“还有”は日本語の“まだ”に相当します。そばにいたほかの観光客は“还有”を忘れ物だと思いましたから、みんな慌しく大声で私の先輩に“还有，还有，わすれないで”と叫びました。面白いと思いながら、大阪人の熱心もかんじました。

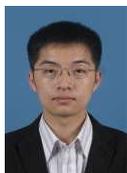
それ以外に、観光地では、写真をとってあげましょと聞く熱心なひとときも時々います。とても感動しました。それは、人と人の調和ではないかと私は考えます。

日本はまだ沢山の優秀な文化財産があります、次回の訪問を期待してやまない。

(日本語原文)

自分の目で見た日本

東華大学大学院 日本語科 2年 顧世淵



2月1日、浦東国際空港。はじめの日本行きが出立した。

8日間の短い旅だが、思い出はいっぱいだ。

2011年10月、南京大学で行われた「笹川杯全国大学日本知識大会 2011」で、自分は、個人四位になり、日本に修学旅行の資格を与えた。今まで、六年間日本語を勉強したが、まだ、日本に行ったことがない。こういうすばらしい機会を与えて、本当に幸いと思う。

八日間の旅行で、東京、沖縄、大阪、京都、日本を代表する四つの所を回り、日本という国を自分の目で見た。

この四つの所の中、自分は、大阪が一番好きだ。日本語と日本文化や社会を勉強する時、少しぐらい、先生が、大阪は上海に似ていると話した。今回、自分で行くと、その感じもあった。例え、心齋橋や道頓堀など、商店街のことや、ちょっと離れて、堺筋などのような下町雰囲気のところ。これらの雰囲気や感じは、上海の豫園や自分の住んでいる町に、似ている。上海人として、大阪にいて、なんか、慣れている感じがする。

東京は、違う。東京のことは、ビジネスや政治ばかりの雰囲気がいっぱい。もちろん、渋谷や新宿のような商店街はある。しかし、町はなんか静かであった。自分のことだけ関心しているような雰囲気があった。地下鉄の中にも、みんな、静かに、ほかの人の邪魔になれないように、自分のことをやっている。本を読むか、ちょっと居眠りするか。けど、これは東京であると自分が思う。

沖縄は、この中に、一番特別なところと自分が思う。歴史的に言っても、住んでいる人たちのことを言っても、沖縄は、特別だ。そんなきれいな海は、はじめて見た。青い海、白い砂、それに、自分の素足。波が自分の足に打っている時、ずっとこのままここに住んでいてもかまわないほど気持ちいい。きれいな海、きれいな空気、そして、きれいな人、これは、沖縄、きれいな沖縄。

最後に行ったのは、京都だ。自分は京都のことが好き。歴史的な京都のことが好き。しかし、それ以上に、日本らしい日本の京都がもっと好き。京都の町を歩いていると、日本という国の歴史、民俗、文化を歩いているような感じがしている。もしも、誰かに、一日で日本を体験するなら、どこがいいと聞かれたら、自分は、京都に行きなさいと答える。

この四つのところを回ると、日本のことをより深く分かった。

都市などを越えて、今回の日本行きでは、一番印象深いのは、日本式サービスである。2月2日、日本の学生と一緒に、東京見物をした。その日に、いろいろの所を回り、買い物をした。渋谷と秋葉原で、電気屋さんところに、メンバーの一人は、新品のカメラに興味あって、何度も操作した。そのときに、彼のそばには、必ず店員さん一人がいる。もちろん、お客様の質問に答えることと、商品の紹介はするが、何もせず、立っているままで、お客様の質問や感想を待っているのは、大部分であった。このまま、一時間ぐらいに、その店員さんは、ずっと、私達のそばにいて、担当をやった。結局、そのカメラは買わなかったが、店員さんは、「ありがとうございました」を言って、見送りした。

自分は、感心した。これこそ日本式サービス、おもてなしだと、心の中で感じた。以前、自分は、日本料理屋で、バイトした経験があった。そのときに、その料理屋にバイトするのきっかけは、その料理屋は、中国人が管理しているが、やり方や、客に対するサービスや、全部日本式であった。入ってから、自分も分かった。確かに、日本式であった。例えば、来店するお客様の案内、受付の所から、お客様が座るまで、どのエリアの店員や、店内に回っている店員や、全部、「いらっしゃいませ」を言って、お客様を迎えていた。中国のレストランでは、こんなことを見たことがない。これが、日本式サービスである。今回は、本場の日本式サービスを見て、感心した。

日本行き、いい経験になった。今まで、日本語を、日本文化を勉強したが、実際に体験する機会がなかった。今回の日本行きは、自分にこんなすばらしいチャンスを与え、本当にありがとうございました。日本にあった人々や、協力してくれた人々に、心より、「ありがとう」と言いたい。みんなのために、自分は努力する。次の日本行き、頑張っていく。再会の日を、待っている。

《中国語原文》

交流と理解は“今回”から始まる

中国青年報国際部 副主任 高鑫誠



4年前から毎年この季節に、少人数の中国人の集団が期待を現実にして予定どおり日本を訪問している。この人々は、中国青年報社、日本科学協会、人民中国雑誌社が共催し、日本財団が特別協賛、全日空社が協力して行った「笹川杯作文コンクール—感知日本—」の受賞者と、「笹川杯日本知識大会」の優勝者である。日本科学協会の招聘に応じ、「笹川杯作文コンクール2011—感知日本—」の一等賞受賞者8名が、「笹川杯全国大学日本知識大会2011」の優勝者等14名とともに、2012年2月1日から8日まで日本を訪問した。訪日団員は主に大学生であったが、他に裁判官、企業経営者、教師、記者もいた。

それまでの訪日団と共通する点は、団員の大多数が日本は初めてだったということである。異なる点は、今回の訪日が“3.11 東日本大地震”発生から一年足らずで、ちょうど中日国交正常化四十周年、2012年“中日国民交流友好年”記念事業が間もなく始まるというタイミングだったことである。こうした要素は、今回の訪日に全く新しい背景をもたらした。わずか8日間で、訪日団は東京から沖縄へ、大阪から京都へと足跡を残し、行程は慌ただしいものであったが、収穫は非常に豊かであった。今回の訪日団の随行者として、筆者は初の訪日ではないものの、共に歩いての見聞、団員達の感じ方などには新たな経験や新たな知識がまだまだあった。

*大震災から節約意識が強化

2011年の「作文コンクール」と「知識大会」は、“3.11 東日本大地震”が発生してほどなくスタートした。訪日団も、成り行き上、震災発生から一年足らずの時期になったため、出発前、団員達には多かれ少なかれ地震と関係する人や物事を訪ねようという考えがあった。しかし、この訪日は地震や津波の被害が深刻な地域には足を踏み入れなかったため、団員の大多数は地震の爪痕を見つけることができなかった。

被災地から何千キロも離れた沖縄は言うまでもなく、当時は放射性物質漏出により深刻なパニック状態に陥った東京でも、大地震の影を見かけることはほとんどなかった。米や飲み水を競って買いだめするというような光景は勿論とうになく、私達と話をした日本人にも“地震”に言及する人は少なかったのである。地震発生後の東京で水道水に放射能汚染が見つかったとは言え、東京に滞在している間に「水道水はそのまま飲めません」と注意されることはなかった。

東京で記者が目にした地震関連の“遺産”としては、一例を挙げれば、地下鉄の車内に貼られた“節電中”表示だけであった。夜が訪れた時、東京の街の明かりは全てが点灯することはなく、東京の夜は三年前に見たものよりだいぶ暗くなっていた。福島原子力発電所が閉鎖され使用停止となったため、日本の電力が不足しているとも考えられる。また、実際に電力不足かどうかに関わらず、去年の大地震から日本国民の資源節約意識がより強烈になったとも考えられる。しかし、日本滞在中にまた別の視点—東京も日本も実際に電力不足なのではなく、“東京電力”のような大企業がそうした電力不足の印象をわざと作り上げている—を耳にした。そうすることで、国民と政界に“脱原発”の声が小さくなるから、とのことであった。

電力不足か否かに関わらず、大地震が日本にもたらした実際の変化は“全国民の節電”である。大通りにも路地にも“節電中”の表示が見られた。各オフィスビルや観光地には節電指標が提示され、達成できないと処罰を受けるとのことであった。エレベーターが2台あるところでは常時1台のみの稼働で、1台は停止していた。公共施設では昼間できるだけ自然光を利用し、夜間の街灯は半分だけ点灯など…

地震の後遺症に関するニュースはそれほど見られなかったが、それより、東北地方の一部で記録的な大雪があり、ある地域では4メートルもの積雪で百人近くが亡くなったというニュースに団員たちは嘆息を禁じえなかった。変幻極まりない大自然の前では、人類はいつもこう救われないものかと。

*日本の伝統文化を感じる体験は“入浴”から

日本到着の初日、訪日団一行は、旅支度もそのままに東京湾近くの大江戸温泉物語で日本の温泉文化を体験した。

温泉文化が一つの文化として成立している理由は、日本では“温泉浴”が古より“入浴”の範疇を超えていたからである。日本人は“温泉浴”が大好きであり、特に年の瀬になると、一年の疲れ、厄、悩みを洗い流すことができると言われている。日本では毎年のように温泉の品評会があり、日本人の“名湯マニア”がトップテンの温泉に足を運ぶ。温泉に入るには、洗うー浸かるー洗うを守り、しゃがんでシャワーしてきれいになってからでないと湯船に入ることはできない。“温泉浴”の時には、人の体以外、タオルなど何も湯船に持ち込んではいならない。温泉によっては、男女混浴のところもあるが、そういう場では誰も邪念を起こさないのである。温泉から派生してきたものとして“浴衣文化”がある。例えば、様々な色やデザインの浴衣を着る時、浴衣の左側を右側の上にしてから、長い帯を締めなければならぬ。浴衣の右側を上にして着ると、縁起が悪いのである。

このように日本人は温泉文化を重視しているのである。日本科学協会の大島美恵子会長も、訪日団歓迎会で、日本文化と社会に対する理解は温泉文化の体験から始まると仰っていた。

勿論、日本人が伝統文化を守り尊重するのは、温泉文化に限ったことではない。

2月3日は日本の伝統である節分の日である。私達は東京の日枝神社で年に一度の盛大な“豆まき”行事を体験した。普段はあれこれ胸に秘めている日本人が、老若男女の別なく、この時だけは徹底的に開放的になり、遠慮なく大声を上げ、神社のスタッフや有名人がまく豆を奪い合い、自分や身内、友人の幸運を祈るのである。

日本の友人によると、似通った年中行事は他にも少なくないそうである。特に日本北部の農村地域では、中国から伝わった節句の祝いが沢山あり、中国でもう見られなくなったものもその地域ではしっかりと守られており、地域の観光経済を発展させるために不可欠の重要行事となっているとのことである。

沖縄では、訪日団員が“先生”の指導のもと、当地の特産ある“サーターアンダーギー”、黒糖の作り方を学び、染め物の体験もした。“サーターアンダーギー”は小麦粉から完成まで、有名な沖縄黒糖はサトウキビから砂糖の塊まで、ウーヅ染めはサトウキビの汁で緑色に染めた布に様々な絵柄をつけるまで、全てが純粋な手作り、古くからのものづくりの特徴を留めていた。

日本訪問の全日程で、訪日団が目にした電器、電子製品など現代的な製品は非常に多かったのだが、温泉文化を感じるといった体験も沢山あった。ある団員が発言していたように、日本が現代化を進める過程で伝統文化を保護し継承してきたことは、中国がまさに参考にすべきことである。

*交流と理解は“今回”始まったばかり

訪日団は、多くの時間を割き東京、沖縄、京都で日本の大学生や各国からの留学生とフェイス・トゥー・フェイスの交流をした。多くの団員に多くの異国の友人ができ、世界、人生、社会、中国そして中国人に対する彼らの本当の考えを理解した。

例えば、2月2日のグループ別の交流活動では、中日の学生が「中国人はストレートでそのまま言い過ぎる」、「日本人は婉曲で曖昧な話し方をする」という話題について議論した。日本の学生は、日本人の婉曲で曖昧な表現法とは、大体において他人に対する一種の礼儀と尊重を表したものであると考えていた。しかし、日本の学生は、この二種類の表現法でどちらが正しくどちらが優れているというのではなく、それぞれの習慣に過ぎないと言っていた。その後、京都で同志社大学の日本人学生と交流した時にもこの話題に触れたところ、ある日本の女子学生が、個人的には中国人の直接的な表現法が好きでも、日本社会では、自宅にいる時を除いて婉曲にせざるを得ないと話していた。

何度も中国を訪れたことがある早稲田大学の飯沼紀行さんは、中国人は初対面の時、よく勤務先や役職を明確に紹介するという話を持ち出した。仕事のことを露骨に話すのは理解し難いし、その必要もないと感じるそうである。なぜなら、日本では身分や地位が知られていなくとも、あるべき尊重は受けられるからとのことであった。

中国を訪れたことはないという別の日本の女子学生は、中国は発展の過程にあって、レアアースの輸出などのように、あまり他国を援助したがっていないように感じられると発言した。これに対して、やや状況に詳しい訪日団員が、「それは日本の新聞やネットから出た話ですね」と応じ、「中国のレアアースの輸出状況をよく知れば、そういう疑問は出てこないはず」と答えた。

フェイス・トゥー・フェイスの交流はとても盛り上がり、取り上げる話題も非常に広範なものとなったが、やはり時間が限られていたため、十分に交流できたとは言えない。しかし、中日の学生はそれほど残念には思っていないようであった。それは、皆、“先は長い”ということを知っているからだろう。成城大学の平崎真右さんは、「わずか一日という時間では、まだ言い尽くせていないことや明確には言えない気持ちが沢山あります。幸い、先は長いので、こうした皆の気持ちをこれから完成させ、深めていこうと思います。」と話した。別の日本の女子学生も、「交流は一日では完成できません。今回はあまりに過ぎないのです。」と話した。

訪日団を引率した南京大学の趙仲明先生も、「人と人との間では、そこから継続できる交流こそ真の交流と呼べるものです。皆さんがお互いに知り合ってから、きっと他の方法でコミュニケーションや交流を継続していくことができるでしょう。」と話された。

今回の訪日の価値と意義について、訪日団団長、中国青年報副編集長の毛浩は、日本に到着した日に次のように話している。「2011年度の作文コンクールと日本知識大会の活動には、多くの善意の表現を見ることができました。これらの善意は、中日両国の関係を良い方向に発展させる重要な力であり、こうした力を更に強力なものにして伝えていくことにこそ、作文コンクールと知識大会の価値があるのです。民間交流、特に青少年の交流は、お互いを知り理解するためにとっても重要なことです。今回、訪日団の青年諸君は日本をゼロ距離で感受する機会を得て、日本に対する彼らの認識はきっと深い影響を受けたことでしょう。そして、そのことが多かれ少なかれ中日関係の未来に影響していくのです。」

《中国語原文》

現世は安穩

海南師範大学 漢語言文学専攻 3年 李芯儀



訪日から帰って以来、私は多くの人々に「今の日本には去年の大地震の影響がまだ見られるの？」と聞かれる。心は動きつつも、私は、そのたび笑顔で否定している。確かに、地震、津波、放射性物質漏出事故は、日本に計り知れないダメージを与えたが、その時、私の記憶の深いところに残ったのは、むしろ明るくきれいで安逸な日本であった。

静寂と無音こそ、短い日本訪問で私の心に最も深く残った音色なのである。

私達の意識においては、大都市と言えば、灰色の煙や埃、騒がしい人の声が付き物だろう。しかし、日本に初めて日本に到着した時、海のように青い空、清新できれいな空気、ごみ一つない道路、たまたに軒先や梢を訪れる小鳥、私はその全てに感嘆したのである。日本人と対話を始めたばかりの時、彼らの優しく穏やかな話し振りにすら馴染めず、控え目な言葉の内に秘められた意味にも慣れない感じがした。恐らくこのような環境、こうした慎重さと控えめな振舞いのおかげで、社会全体に落ち着いて温和な雰囲気醸し出されているのだろう。

私は、日本に長い間住んだことがあるわけではないが、この人々が充実していて安逸な暮らしをしているのだろうと想像することはできる。都市の進展は、決して古き良きものが存在する余地を奪っていない。ビルが建ち並ぶ大都市の曲がり角にでも、ずらりと並ぶ古風で素朴な平屋や緑に囲まれた神社仏閣を見つけることができるのである。こうした存在が、賑わう都市の現代化の精神に背反しているわけではなく、却ってその独特な姿により、街の中で鮮明な地位を占めているのである。新旧が融け合っている環境は、人々の進歩的な現代の新しい思想に敬虔で素朴な意識を注入し、人々が生活保障と発展のチャンスを追求めると同時に感性や精神性も重視するようになり、豊かで充実した心を得られるようになるのである。だからこそ、どのような災難や困難に見舞われても、日本人は自らの生活に対して自然に自信を持てるように見えるのかもしれない。彼らは自然の力も神の力も信じているが、それ以上に自らの力を信じるのである。これらの強靱な精神力が相互に作用する中で、人々は安穩と暮らしているのである。

日本を歩く多種多様な他人達は、それぞれ悲喜交々の家庭、全く異なる夢、突然訪れる生死を抱え…全て時間が流れるうちに慌ただしくその姿を変えていきます。こうした瞬く間に過ぎ去る美しさ、小さくささやかな生活、全てが大切な安らぎを内包しているのである。八日間の慌ただしい見学が本の一瞬に過ぎないことは十分に分かっているので、より深いレベルの事柄に関してみだりに結論を出したりはしない。とは言え、わずか八日間、日本という馴染みがあるようでいて実は知らなかった隣国を見た者として、尊敬すべきことや学ぶべきことを沢山感じ取ることはできた。私は、自然と「願いは歳月を鎮め、現世を安穩にする」という思いを抱かずにいられない。

《中国語原文》

清く澄んだ童心

汕頭市龍湖区人民法院 裁判官 王晓霞



東京行きの飛行機に搭乗する瞬間、私の心は少し複雑だった。かつて中国の人民と歴史に痛みを与えた国を感じ取るなんて、どういう態度で臨むべきなのかと。やはりひとまず置いておこう、子供のように、わだかまりを抱かず先入観を持たず臨んでこそ、公平に如実にこの隣人を知ることができるのではないだろうか。

三鷹のジブリ美術館を見学した時、精巧で美しいガラスの彩色画、輪郭に潤いのある戸や窓、無邪気で実にかわいらしいトトロ、額縁の中は人を魅惑する童話の世界で、展示は子供達のためというのが設計の核心理念であった。しかし、成年見学者としては、終始ある種の不可思議な感覚に包まれていた。想像力に満ちた動画のショートフィルムは、自然を大切にする心が表現していたが、軽快な画面に向けた視線を捉え、骨髄まで深く入り込んでいた。見学している人々の表情を見ると、それぞれ興奮や驚きに満ちており、感動しているのは決して子供だけではなかった。

美術館はさながら日本民族のある特性を感じ取らせる窓のようなものであった。慎ましく厳格な外見の下に、日本人は無邪気な童心を隠し持っていて、清く澄み清新で豊かに充実しており、大自然と一体に溶け合って、真善美に対して本能的な感受性を持ち、心から愛しているのである。第二次大戦後の日本は凄まじい勢いで発展したが、日本で伝承されてきた伝統文化やヒューマニズムの精神は、こうした清く澄んだ童心の支えがなかったとしたら、想像し難いものである。

このように童心を持っているという特性があるからこそ、日本民族は山や川、草木を神霊として崇拝しているのだろう。こうした信仰に由来する内面的な尊重は、人々の日常生活と社会構築のいずれにおいても強大な拘束力を持っており、自然、特に日本自体の自然や資源に畏敬の念を抱き、破壊せず、略奪せず、調和が続くよう努力するのである。

相対的には理性的な態度で数日間日本を訪問し、日本民族には私達が学ぶに値する尊い素養があることを“発見”したということを、私は認める。清く澄んだ童心を持っていること、これがその一つである。

《中国語原文》

祈りの地

四川師範大学 数学・応用数学専攻 4 班 王珂旻



今回の日本訪問で私の日本に対する印象を真に深めたものには、恐らく神社の存在があるだろう。

日本では、至る所に神社がある。京都のような古都は自ずと言うに及ばない。様々な様式の神社が昔の趣溢れる街の建物と調和し、京都全体に清らかで静かな禅的雰囲気漂わせている。しかし、東京のような国際的大都市においても、大小の神社が現代的なビル群の中に嵌め込まれ、渾然一体となっている。こうした神社の存在は、都市に古き良き景観の美しさをもたらすだけでなく、“静”の意味をも与えるのである。こうした“静”は人の心を静め、自らの心の内に集中させ、自分本来の仕事に集中させてくれる。都市の枠の中で自由に生活し喧噪を見慣れた私にとって、こうした“静”は想像し難いものである。

もしも日本の“静”が神社に由来するのであれば、日本のある種の“騒”も神社に由来している。2月3日は節分の日で、私達は東京の日枝神社で日本の伝統行事「豆まき」に参加した。この日、沢山の神社の職員や力士などの有名人が神社を訪れ、神殿の前にある高台から魔除けと招福のため民衆へ豆をまきました。“豆まき”が始まる前、高台の周囲は既に人の波でごった返しており、“豆まき”が始まると、次々と降ってくる豆に人々は沸き立った。一秒前まで黙々と集まっていた人々の群れ、スーツに革靴のサラリーマン、日頃は声を抑えて話しているであろうおばあさんや主婦、恋をしている少年少女、その誰もが恍惚として一瞬だけ箍を外し、「こっち、こっち」と叫び声を上げ、腕を振り回して豆を受けていた。イベントが終わって、やっと自分の喉が少しかかっていることに私は気づいたのだが、手の中に“奪った”豆を見ると、豆を手にしたあの日本人達と同じように、一種の幸せな満足感が得られた。

日本の神社は、静かな一面であれ騒がしい一面であれ、一種の信仰の雰囲気を人々にもたらし、人々は気づかぬうちに期待と希望に満ち、この幸福を祈る地に酔うのである。

東京滞在の最後の夜、私は一人で宿から近い東京タワーに行ったのだが、その途中で名前も分からない小さな神社に差しかった。街灯の下の神社は注目を集めることもなく、その傍にある建物と共に月夜の東京の澄み切った景色を構成していた。私は神社の境内に足を止め、数十メートル離れた本殿に手を合わせて黙々と幸福を祈った。今回の日本訪問で付き添ってくれたスタッフ、先生、学生仲間のみんな、交流を持った日本の友人達、手を貸して笑顔を見せてくれた全ての人達が、平安な一生を送れますように！と。

《中国語原文》

和して同ぜず

四川大学 華西臨床医学院 4年2班王丹青



こここのところ北京、成都、綿陽の街頭を歩いていて、私はたまにまだ東京、沖縄、大阪、京都の街角を歩いているような錯覚に陥っている。

整然として乱れのない交通、慌ただしく行き過ぎるきらきら輝く美しいサラリーマン、目が眩むように林立する高層ビル、狭い通り、せわしない東京のリズムとゆるやかな沖縄のリズム…どれも以前に中国国内のメディアで目にした情報どおりであった。私からすると、今回の日本訪問でより本物を実感したのは、日本各地で日本の学生と交流を持ったことである。

東京では、私達は一緒に街を歩き、食卓を囲んで食事をしたりお茶を楽しんだりした。私達が話したのは四方山話、生活のこと、理想のことなどである。異なる国で生活し、異なる言語を話していても、私達が関心を持つことは同じようなものであったりした。学業、恋愛、就職の理想、中日関係、瞬時に千変万化する国際情勢など。もしも直接参加しなかったら、ここまでリアルに感じ取ることはなかったと思う。

沖縄では、私達は、日本の学生と一緒に「サーターアンダーギー」（現地の特徴的なお菓子）を作り、染め物の作品も作り、島の人々の親切でさっぱりとした自然な振る舞いと真心を感じ取ることができた。白波が打ち寄せる砂浜では、全員が一緒になって躍り上がり、笑顔でカメラに収まった。あのひと時、私達は、国籍、性別、年齢の違いを忘れていたのである。

京都では、同志社大学で学んでいる各国の学友と共に清水寺、金閣寺を巡り、道中では古法、禅道、建築物、風習などについて話し合った。イタリア、イギリス、アメリカ、韓国からの留学生も加わって同じ道を歩き、同じ景色を見て、違う文化について議論をしたのである。

日本に踏み入り、日本人に近づいたことにより、私には、木を見て森を見ない邪推や盲目的な偏見が減り、理性的で客観的な考えが多くなった。私は、“違いを探す”視点で日本に入ったのだが、毎日の「ブレインストーミング」によって大量且つ急速に異文化間でぶつかり合う交流のおかげで、私は秘かに気持ちの基調を「和して同ぜず」に調整することができた。私達の生活環境、人生の道、歴史、文化の蓄積はそれぞれ同じではないが、私達には同じところもあって、その一番に挙げられるのは、恐らく素晴らしい生活の追及、つまり“和”への善良な願望である。

日本で最も深く印象に残った言葉は“一期一会”である。短い訪日日程は終了したが、これは、私にとって、新たなスタートである。一認識を新たにして、日本と日本人をより深く理解するのだ— 内気ながら友好への情熱を失わない日本の皆さんとまたお会いできることを期待している。

《中国語原文》

初めて知る旅

ネットワーク 経理 周毅



仕事柄、今回の短い訪日で、私は日常の交流や観光と同時に、日本の知的財産権保護などの扱いや効果について特に関心を持っていた。

日本を旅行、観光、訪問する多くの中国人と同様、私達訪日団メンバーの多くも、沢山の“日本製品”を購入した。中国国内でも買える品物を、なぜ遙か遠く日本で買うのだろうか。思うに、価格的要因の他に、大多数の人は私と似たような気持ちであり、日本で買い物がより安心できるからではないだろうか。実際、今回、日本各地で買い物をしたが、そもそも商品の真偽を如何に見分けるかなどということは全く思いもしなかったし、買ってから偽物だと分かったものも無かった。私の知る限り、日本では知的財産権保護の重視がある程度所定のこととなっており、関連法がよく執行されていて、市場には海賊版の商品は殆ど見られない。

日本では古い建築物の保護も重視されており、都市の建築物は風格が統一されていて、個性が鮮明になっている。例えば京都では、今に至るまで全体的に青みがかったグレー系を基調とする色合いに保たれている。当地の人の話によると、その建築物には厳格な要件があり、建屋が少しでも高くなり過ぎてはいけないそうである。上に延びて日光を遮るような屋根や全体的美観を損なう装飾は撤去を求められるとのことであった。

日本の観光関連製品も特徴的である。各地域、各観光地では、それぞれ特徴的な観光関連製品が見られ、しかも、それらはその地の文化の延長線上で作られたものだったのである。例えば、様々な材質や表情の獅子、造型や色彩が豊かな手作りガラス製品は、一目で沖縄のものだと分かるし、デザインが精巧で、モデル毎の流通量が限られている“清水焼”は、見れば京都のものだと分かるのである。有名なアニメの関連グッズでさえ、各地域の限定版がデザインされ、それぞれ異なった姿をしていた。これと比べると、中国の観光関連製品はやや紋切り型で、特徴があまり鮮明ではない。

時間が限られていたため、今回の訪日は表面的としか言えないが、日本に対する印象を補いとても豊かにすることはできた。私にとって、今回は単なる“初めて知る旅”であり、間違いなく最後の日本旅行ではないのである。日本科学協会が開いてくださった歓送会でまさに話したように、私は、そう遠くない将来再び日本を旅行しようと準備し期待している。この国の風景、社会、文化をより深く感じ取り、認識し、理解するために。

《中国語原文》

訪日で考え方に変化が

湖南省新寧県第一中学教師 譚詠



“小さな地方”出身の視野が限られた一中学教師にとって、作文コンクールで受賞し、日本で観光や交流ができたことは、とても予想外のことであり、非常にエキサイティングなことであった。今回の訪日での収穫は、他のメンバーを上回るものであったかもしれない。

収穫の一つは、今回の旅行で日本に対する誤った認識を修正できたことである。私の受賞作『日本にも教師の日はある』のうち、一部の内容と細部については、伝聞によるものであり、通常の論理と考え方から事実はそんなものかと私が思って書いたものであった。しかし、日本に到着して必ずしもそうではない事柄もあるということに気づいたのである。私は非常に恥ずかしく思ったが、とても幸せなことだとも感じた。もし、自ら日本を訪れていなかったら、そうした誤解が今でも頭に残っていたかもしれない。

今回の日本訪問では、日本に対する私の幾つかの具体的な印象が修正できただけでなく、より大きな収穫があった。それは、物事に対する認識は決して噂を頼りにしてはならず、まして当て推量などしてはならないということが分かったことである。自分で真偽が証明できない事柄に対しては、慎重に慎重を重ね、広く証拠を求めてからでないと結論は下せないのである。今回の訪日は、私の思考法に対する有益な衝撃であったと言える。

《日本語原文》

命の出会い

東北大学日本語学部 4年 劉 倩



光陰矢の如し、私たちは手を振って別れを告げました。八日間の訪日交流活動は間もなくそのように終わりました。日本に経験したすべてはまだ残っているように、悲しむ余裕がありません。飛行機はもう首都国際空港につきました。その瞬間、両足はもう中国国土を踏むこと、一期一会の命の出会いがもう終わることをまだ、全然感じられません。

顧みると、風が頬をかすり、思い出と悲しみを持ってくれました。沖縄の緑の海、海と一つになる青空、青空の下に躍り上がって喜ぶ私たち、私は一生忘れられません。京都の千年の古刹、古刹の周りに生きているコノテガシワ、コノテガシワの下に敬虔な私たち、私は一生忘れられません。大阪の商業の繁栄、繁栄のなかに往来がにぎやかな人々、人々の中に緊張しながら、興奮した私たち、私は一生忘れられません。東京の静かな星空、星空の下に燃える東京タワー、タワーの前に驚く私たち、私は一生忘れられません。数えきれない画面はまだ頭の中に浮かんでいます。数えられない感動はまだ心のなかに残っています。なんと地域と国籍を越えて、みなさんともう一度、その旅にでて、その風景を経験したいです。

八日間の訪日交流活動を顧みますと、日本の高いビル、きれいな道とにぎやかな店より、日本国民の親善と友好のほうにもっと印象深いと思います。八日間、私たちは主に三つの大学の学生と交流しました。異なる地域、異なる出身と異なる教育を受ける学生たちは異なる個性を身に着けました。でも、唯一同じなのは彼らの心から現れる純粹と善良だと思います。

活動が終わっても、私たちと一緒にホテルにつれられてきた健人君は深夜まで、喜んで私たちとビールを飲みました。当時に健人君が日本人、早稲田大学の精鋭だということを全然気にしませんでした。ただ友達同士として、各自の過去について、共同の未来について、なんでもしゃべりました。

初対面で耳まで赤くなる杉本君は恥ずかしがる男の子です。時間の流れにしたがってお互いにだんだん親しくなりました。杉本君は私たちのガイドさんになりました。かわいいの使える場合、同志社大学の歴史、花見の準備と祭りの場面などいろいろ教えてくれました。本当にいい勉強になりましたよ。もしもっとも優秀なガイドさんとの賞を設けたら、杉本君は絶対選挙に勝つと信じます。

陽光、砂浜と海洋の粋を吸収している沖縄大学の学生たちは元気いっぱい、若さに溢れています。足首を挫いたとき、彼らは助けてくれました。私がお飯を食べるか、どうかとの小さいことまで、気遣ってくれた、ほんとうに心からありがたいです。私たちは砂浜で手を繋がりながら、太陽に向かって走ることは一生忘れられません。

一つの旅の終わりはもう一つの旅の始めだと思います。でも、自分の命の旅に印象深い人と事に対して、なかなか忘れられません。これからお久しぶりの別れはまた短い出会いを換えたら、期待に値すべきだと思います。もしかしたら未来のある日、私たちあるいは私たちの子孫はまた、沖縄の海の前に、東京のタワーの下に会えて、私たちについての物語を思い出し、桜の美しさを観賞し、中日友好の輝かしい一章を書くことができるかもしれません。私も心をこめて、そのように祈ります。

《日本語原文》

豆まきから見た日本人

中南林業科技大学日本語学部 4 年 羅紫薇



旧正月のめでたい雰囲気にもまれたまま、半年ぶりにまた日本に行きました。深い未練が残っている場所に再び行けることが何よりだと思います。短い間ですけれども、私はどきどき興奮しています。

今回は中日友好を主題とする訪日団の一員として、日本の東京、沖縄、大阪と京都を回りました。そして、観光をしながら、各地の学生と交流して、日本をもっと深く理解することができました。まばゆいばかりの東京タワーの美しさ、そしてジャングル社会に似てるメトロポリタンスタイル、心地よい海の風景と千年にわたる歴史を持つ古都の魅力は、いずれも人の心をひきつけています。でも、そのうちに一番印象深いのはやはり日枝神社で豆撒きという節分の行事だと思います。

日本では、2月3日は節分の日です。その日津々浦々の神社では節分の豆撒き、つまり邪気を祓い清め、運氣と幸福を招き入れるめでたい行事が行われます。その行事は中国から伝われ、室町時代から今まで続いています。私たちは東京都千代田区に位置する日枝神社で豆まきを体験しました。本当に楽しかったです。

豆まきを始める前に、早く場所取るをしようとする人が多かったです。午前 10 時半、いよいよ豆まきが始まりました。芸能界とスポーツ界の方々が福男、福女とともに法要に参列しました。祈祷が終わってから、彼らは神門前の特設やぐらに上がり、「福は内、鬼は外」といいながら、詰めかけた大勢の参拝客に豆をまきはじめました。豆を手に入れるために、老若男女が押しつ押しされつしていました。そして、人々はひとしきり歓呼の声を上げました。それに、福豆にはさまざまな福物と交換できる券が入るから、境内は福を得ようとする多くの人々で賑わいました。

普段自分の行動をかなり心がけて、慎重な態度で示す日本人は意外にすごく活躍していました。公共の場所では大声でしゃべったり、騒いだりすることが絶対ありえない日本人へのイメージが少しずつ変わってきます。日本社会において、人々は社会規範に従って、時々自分の行動を抑えています。だから、ある面から言うと、すこし重苦しい雰囲気が溢れていることが挙げられます。でも、私は豆まきという伝統的な行事から日本人にあまり見られないはっきりした個性が読み取れました。実は、豆を手に入れるかどうかはどうでもいいです。大切なのはその過程を楽しんでいる気持ちだと思います。そして、豆まきが希望と幸福につながるし、人々のめでたいお祝いの現れでもあります。

2011 年に起きた東日本大震災は人々につらい思いをさせますが、斬新な気持で新しい年を迎えなければなりません。テレビで放送されたドラマ「仁」に「神様は乗り越えられる試練しか与えない」という言葉が印象的です。目を覆うような災難が降りかかっても、日本人が必死になってその試練を勇気を出して乗り越えてくることを私は確信しています。

沖縄大学国際コミュニケーション学科中国語専攻2年次 友利尋子

今回、交流会2部の方で、司会という大役を仰せつかわり、光栄でした。中国の大学生達と交流出来たのは、私にとってとても有意義なものでした。今月の26日から上海へ1年留学する予定私は、中国の大学生達を通して、また中国が好きになりました。

日本語が凄く上手で、日本文化にも理解のあるみなさんと交流していくうちに、自分の中国語のレベルの低さを感じると共に、もっと勉強したい！絶対に中国語をマスターし、みなさんとまた再会を果たし、中国語でお話しがしたい！

という思いが胸の中に溢れました。

みなさんとは、一緒にウーヅ染めし、互いに思い出作りをすることができ、みなさんの笑顔や嬉しそうに作業をしている姿を拝見するたびに私も心からうれしく思いました。一つのことをつくるということと一緒にすることの意義が見えてきました。異文化交流を通して、みなさんに沖縄のことを少しでも知ってほしいという気持ち、そしてまた沖縄へ来てほしいという強い思いが私にはあったので、喜びに満ちた笑顔が私には一番の思い出となりました。感謝の思いでいっぱいです。

しかし、今回の交流会で一つ残念なことがありました。それは、アウトレットモール豊崎で、みなさんを一人一人案内が出来なかったことです。

みなさんからは、自分たちで好きなように買い物がしたいという要望があったので、今回は仕方なく下がりましたが、次回では、是非すべて案内をさせて頂き、交流を深めることが出来たらいいなと感じました。そして、体験の種類をもっと増やし、エーサーや琉舞なども体験を少しでもして頂けたらと思いました。

今後も沖縄の素晴らしさを中国の方に知って頂きたいので、来年も是非交流会をして頂けたらと思います。

その時には、全力で沖縄大学の学生が交流に参加させて頂きたいです。私も上海帰りなので、交流会の場をお借りして、中国語力を発揮させて頂きたいと思います。みなさんとの縁を、これから様々な形で続けさせて頂きたいです。

今回のみなさんとの心温かい出会い、一生忘れません。本当にありがとうございました。（日本語原文）

沖縄大学 2 年次 阿嘉洋一

「中国の学生が海に来たのは初めて～」という言葉聞いたときは一瞬驚き、納得した。一緒に本屋に行き、中国の学生が本を選んでいた。私が「外国語の本を読むのはむずかしくないですか？」と聞くと、「難しいけど簡単なものだけ読んでいても勉強にならないから」と応答。確かに当たり前だが、中国の学生の学ぶ意欲を感じさせられた。私にとって良い刺激となった。互いに交流を通してさまざまなことを学び、刺激を感じることで向上していけると学んだ。言葉の壁以外、私たちの間に壁はなく、人間同士の触れ合いを感じることができた。素晴らしい出会いであった。日中友好のために続けていくべきである。今度は、私たちが中国で交流する機会がほしいです。（日本語原文）

沖縄大学留学生 1 年次 王金枝

沖縄大学の留学生で、中国国籍の王金枝と申します。2月5日に中国訪日団の受け入れをした。

沖縄の美しい浜辺で祖国からの訪日団を迎えたことで、この上なく感激した。前日の夜は興奮して眠れなかった。異郷にいながら身内と顔を合わせる人と似たような気持ちだったと思う。訪日団は日本知識大会と作文コンクールの優勝者である。前置きを日本語にするか母国語にするか迷っていた時、祖国から来たみんなと直接対面して、言語の心配は余計なことだったと感じた。日本語でも中国語でも、あの時の親しみを表しきることはできなかったことだろう。

訪日団には学生、先生、編集者、裁判官がいて、日本語専攻の人、余暇に日本語を学んでいる人、流暢に日本語を話せる人も、日本語を話せない人もいた。訪日団の皆さんの沖縄に対する第一印象は、私が最初に持った感覚と同じだったのだろうか。日本に来たのに、馴染みのある空気が流れていると。私達は沖縄の特徴的な活動、黒糖づくりやウーヅ染めなどを体験した。海辺で一緒にジャンプした写真を撮ったり…皆さんも、私と同じように沖縄を気に入ってくれたらと思う。なぜなら、沖縄の美しい海だけではなく、日本の沖縄の人々の誠実さと親切さを深く感じられただろうから。

「異文化友好交流の夕べ」では、沖縄県豊見城市の照屋議員が流暢な中国語で挨拶し、訪日団の代表もきれいな日本語でその日の感想を発表した。改めて、異文化の交流はこれほど容易なものなのかと感じました。訪日団代表の日本語はさらに説得力があり、私も頑張って日本語をマスターし、中日交流の橋とならなければならないと強く感じさせられました。これも日本に留学している成果の現れです。こうした中日の交流会が大いに開催され、中国人が日本を理解し、日本人にもより中国を理解してもらえることを切に望んでいる。

中日交流会に参加後、日本の同級生は日本のフェイスブックに中日交流会の感想を次のようなことを書いていた。「楽しかった。中国人の誠実さを感じることができて、中国がもっと好きになった。中国に留学する不安がなくなった…」今回の中日交流会の意義は、ここに一番よく現れていると思う。(中国語原文)

同志社大学留学生 李鳳賢

笹川杯の訪日団を送別して感じたことはたくさんある。受賞者に日本語専攻以外の学生が多くいるのを知った時、これは本当の全面的な中日交流活動だなと感じた。中国の東北地域から西南地域に至る地域的な広がりだけでなく、普通の大学生から普通の労働者までという参加者の社会領域の広さがより重要であると思う。特に、大会参加条件が16歳以上でさえあればよいということを顧先生から聞いた時、すぐ頭に浮かんだのは、作文が好きな従妹と母校である高校のことである。沂蒙老区の地域文化では、素朴で善良な人柄に育つ反面、思想があまりにも保守的になってしまう。また、私が卒業した魯東大学は情報の問題から参加することができなかった。山から出てきた留学生の一人として、郷里の同胞達も出てくることのできるよう望んでいる。今回の交流でもう一つ貴重なことは、中国からの訪日団と中国人留学生だけの交流でなく、日本人学生、韓国人留学生、欧米人留学生との交流に関わり、グローバルな国際交流に拡大されたと言えることである。中でも興味深かったのは、イタリアの留学生ドロラさんです。名前は中国語で杜芳拉と書くのだが、彼女がミラノ大学で学んでいた専攻は日本語で、中国・イタリア・日本語と東洋と西洋を一身に集めていると言えるだろう。彼女との交流により、第三者の視点から中国と日本を理解することができた。

わずか7時間であったが、お互い見ず知らずの仲が離れ難く思うまでになった。今後もこうした交流の機会が有るかどうかわからないが、このような余計な心配を訪日団の同胞が口にしたのを聞き、実際無いのなら、自分たちで作ろうよと胸を張り自分に言い聞かせた。私が今回の交流活動で学んだことの中には、責任感もあると思う。

交流が未永く継続され、参加者の範囲が祖国の津々浦々まで浸透するよう願っている。現在の自分にとっては、今回の活動の成果と、そこから得られた喜びを、親兄弟、先生方、同級生、友人達みんなと共有し、みんなも参加できるといいなと思っているところである。(中国語原文)

同志社大学留学生 孔鈺生

先生方、笹川杯の主催者の皆様方、このような貴重な機会をありがとうございます。祖国の各地域と日本の若者と共に遊び、新鮮なものごとを分かち合えたことは、とても楽しい経験になりました。新しい友人と知り合うこともできました。たった一日ではありますが、人と人との交流で世界との距離が縮まったように感じます。そして世界のみんなが兄弟のようだと思いました。(中国語原文)